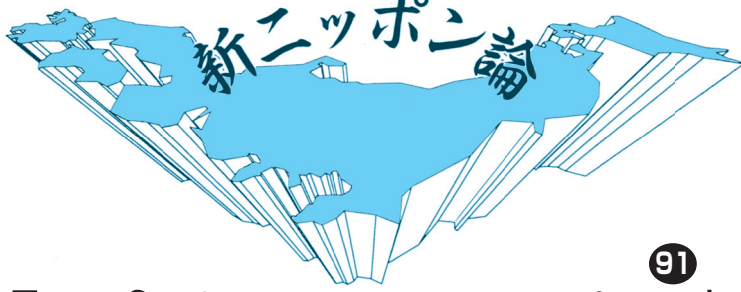


田中康夫の



91

「# あたおかニッポン」

「早期発見・早期治療」こそ日本が誇る「国民皆保険制度」の根幹。而して「範囲・濃度・蓄積」の何れも変幻自在な放射脳と同じく「無色・透明・無臭」で、人間の五官が

基本に戻って「早期検査・早期対応・早期隔離」が肝要な筈。

にも拘らず、「コロナ、それほどのものか」と「朝日新聞」独占インタビューで2020年3月18日に嘯いた内閣官房参与・川崎市健康安全研究所長の岡部信彦。

「PCR検査が多い国の方が死亡数が多い」と5月4日に会見で、更に年末12月6日のNHK「日曜討論」では「感染しても60歳以下の人は症状が軽い」と大言壮語した新型コロナウイルス感染症対策

分科会会長・地域医療機能推進機構理事長の尾身茂。「誤託宣」を披瀝の「PCRスナ派・ワクチン妄信マンセー派」「パチモン医師・パチモン専門家・パチモン著名人」が跳梁跋扈。

COVID-19「新型コロナウイルスウイルス感染症」の感染者が日本国内で最初に確認されたのは昨年1月15日です。その1年後の2021年1月8日、ノーベル生理学・医学賞受賞の碩学4名（敬称略で

察知し得ぬ極めて厄介な存在が今回の疫病。歩むべき道を見失った際には「Get back to basics」。「よく食べ・よく寝て・よく洗う」インフルエンザ3原則と同じく今回も

五十音順に分子細胞生物学の大隅良典、天然物化学の大村智、分子免疫学の本庶佑、幹細胞生物学の山中伸弥）は「声明」を発表。「過去一年に渡るコロナ感染症の

拡張が未だに収束せぬ現下の状況を憂慮し、以下の方針を政府に要望し、実行を求める」檄文と共に「PCR検査能力の大幅な拡充と無症候感染者の隔離を強化する」、「医療機関と医療従事者への支援を拡充し、医療崩壊を防ぐ」等5項目を列挙しています。

が、豈図らんや「誤送船団・記者クラブ」の新聞やテレビは疎か、雑誌やネットメディアに至るも、四賢人の諫言を「黙殺」し続ける「#あたおかニッポン」。1918年11月大正7年3月4日に米國カンザス州フアンストン陸軍基地で数百名の兵士が発熱したのが実質的

発症源の「スペイン風邪」。世界中を席捲し、日本国内でも3波に及んだ流行は別けても2度目が凄惨を窮めます。旧・内務省衛生局が編纂の文書には38万8727人の犠牲者を以て、4年後に「打ち勝った」と記されています。驚く

勿れ、改竄や毀棄とは対極の「記録を残す」倫理観が1世紀前の日本には存在していたのです。

では、どうして、どのようにスペイン風邪は終熄したのか、その理由を明確に語る事は米国立アレルギー・感染症研究所のアンソ

ニー・ファウチ所長ですら難しい。それが有為・転変し続けるウイルスという厄介な存在です。「厚生省と私が言っているPCR検査の目的は端から違うんです。サイエンスの基本的な考え、詰まり無いものを科学は証明出来ない。有るということだけに意味がある。ですから、戦況を見極める目的でPCRを用いるべき。早期の検査はコロナ感染の拡がりを防ぐ予防手段なのです」と「孫子の兵法」を説き続ける本庶博士。

自宅療養者が4万人に迫っても、ベッド数1万8千1#Tokyoインパール2021「選手村の転用を決断せず、「酷民」を見棄てる日本。基準地価10分の1以下で取得し、都庁22名OBを養う建設業者・不動産業者も阿諛追従で黙して語らず。「仮定の質問」には

応じぬ気概を貫く御仁に至っては、リオデジャネイロのサンバ・カーニバルが中止を決断しても猶、古今東西の預言者も平伏す「ワクチンを前提としなくとも安心・安全な大会は開催可能」と国会答弁。

因みに「あたおか」とは一昨年、SNS上で若者の人口に膾炙した「あたまたおかし」の符牒です。

★次号の発行日は2021年2月16日。